愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第 12 号
2011.5
55-62p.

小牧山城とその城下町の土師器

鈴木正貴

尾張国を掌握した織田信長は、天下統一を成し遂げるために拠点を清須から小牧、岐阜、安土へと移動した。これらの移転は城下町建設を伴うことが明らかになってきたが、本稿ではその移動の実像の一端を、小牧山城関連の発掘調査で出土した土師器を通して検討した。その結果、土師器生産者は清須から小牧へ移動した可能性が高いが、小牧から岐阜には移動せず一部を除き再び清須に移転したことが推測された。そのあり方は信長の動きとは連動しないことが判明した。

はじめに

永禄 6 年（1563）に織田信長は自身の拠点を清須から小牧に移転した。小牧は美濃国攻略の足掛かりとして選地されたとみられるが、実際には山麓に広大な城下町の建設を伴うものであった。そして永禄 10 年（1567）に美濃攻略が実現すると、次は拠点を岐阜へと移した。天下統一に向けて京都を視野においた移転であろう。そして､最終的には安土に至ることとなる。

こうした 1560 年代以降に信長が実施した拠点の度重なる移動の実態を明らかにし、それぞれの移動の目的やその度に達成された変革の実像を考察することは、織田信長政権を考える上で基礎的な作業の一つになると思われる。そこで、本稿は、尾張国内の拠点の移動の実像を探るための足掛かりとして、小牧と清須から出土した土師器を検討することとした。

研究史

小牧に広大な城下町が存在することを学術的に再評価したのは、前川要（前川 1988）と千田嘉博（千田 1989）である。この研究成果を受け、小牧市教育委員会は市内の遺跡詳細分布調査（小牧市教委 1990）や発掘調査を行い、ほぼ千田が想定した城下町の範囲において 16 世紀後半の遺構や遺物が発見されることが判明してきた。この結果、小牧越しは決して臨時的な移転ではないことが明らかになったといえる。小牧の発掘調査は、山城部分や山麓部分そして城下町部分とさまざまな地点で発掘調査が行われており、多くの成果が出ている。その発掘調査歴は表 1 にまとめておく。

一方、小牧へ移転する前の清須についても発掘調査や研究が進んでいる。清須に関する研究史はここでは省略するが、清須から小牧への移転の実態を出土遺物から最初に考察したのが、筆者の研究（鈴木 2001）であった。そこでは瀬戸・美濃窯産陶器の時期別組成を、各遺跡の段階ごとに整理したのだが、時期別組成のピークとなる時期を順に並べると清須Ａ群（典型的な清須前期）→小牧群→清須Ｂ群（天正地震直前）→清須Ｃ群（典型的な清須後期）となるこ

表 1　小牧山城関連の発掘調査歴

地区	遺跡名・位置	調査	調査年度	文献（発行年）
主郭地区		試掘調査	平成16年度～平成19年度	2005～2008
		発掘調査	平成20年度～	2009～
帯曲輪地区	搦手口東部	緑地整備第１次調査	昭和61年度	1990
	南西部	緑地整備第２次調査	昭和61年度	1988
	搦手口西部	緑地整備第３次調査	昭和62年度	1990
	搦手口東部	駐車場用地ほか	昭和63年度	1990
	屋敷跡伝承地		昭和63年度	1990
	北部	柔剣道場用地	昭和63年度	1989
	東麓	旧中学校用地	平成10年度～平成14年度	1999～2002
城下町地区		市内詳細分布調査	昭和63年度～平成元年度	1990
	新町遺跡	試掘調査	平成６年度	1998
		第１次調査	平成７年度	1998
		第２次調査	平成７年度	1998
		第３次調査	平成８年度～平成９年度	1998
		土地売買関連	平成18年度	2008
		第４次調査	平成19年度	2009
	上御園遺跡	国道拡幅関連	平成３年度	1992
		共同住宅関連	平成13年度	2002
		確認調査	平成15年度	2008
		第１次調査	平成16年度	2008
		第２次調査	平成17年度	2008
		第３次調査	平成18年度	2008
	上鍛冶遺跡	共同住宅関連	平成８年度	1997
	小牧池田遺跡	道路改良	平成９年度	1998
	仮称小牧城下町遺跡	市庁舎建設	平成18年度	2008

とを明らかにした。この他に、土師器についても、丸耳で鍔付きの土師器釜Ａ類（清須前期）→丸耳で鍔無しの土師器釜Ｂ類（小牧）→板状耳で鍔無しの土師器釜Ｃ類（清須後期）という流れを予察している（鈴木 2001）。

次に、16 世紀後半の尾張地域の土師器の研究史を簡略的に振り返っておきたい。まず、土師器皿については、最初に佐藤公保が中世尾張における概要と編年を明らかにした（佐藤 1986, 佐藤 1987）。その後、一宮市域を中心に土師器の変遷を明らかにした武部真木（武部 2001）や小型非ロクロ成形土師器皿を詳細に検討した佐藤公保（佐藤 2002）は、それぞれ小地域による土師器の多様性を明らかにしてきた。これらの研究を受け、筆者は東海地方の土師器を含めた遺物様相は階層的な地域相にまとめることができ、尾張地域（中地域）の中でも細かな違いを持ついくつか小地域の土器様相が存在することを指摘した（鈴木 2005）。こうした状況の中、尾張でも個別の遺跡についての詳細な分析がいくつか存在する。清須出土土師器については筆者の３期６段階区分（鈴木 1995）を基本にして、特に土師器皿に関しては蟹江吉弘（蟹江 1996）、早野浩二（2005）らが多くの知見を加えている。小牧出土土師器皿については、発掘調査成果を整理する中で小型非ロクロ成形土師器皿を中心とした分類案が提示され、法量などが検討されている（中嶋 1998・水野 2008）。ただし、この両者を有機的に結びつけて論じた研究はこれまでに行われてこなかった。

次に、中世尾張の土師器煮炊具について研究史を概観すると、最初にその全体像を整理したのが北村和宏であった（北村 1996）。その前後には、清須城下町出土資料を中心に筆者もいくつかの論考を提示した（鈴木 1994・鈴木 1996 他）。一方、小牧出土土師器煮炊具については、先に触れた清須→小牧→清須における釜の変遷を述べた筆者の予察と、それに対する検証（水野 2008）が行われている。小牧城下町は岐阜へ移動した後も一部に町屋が継続した部分が残るのだが、水野聡哉はその一つである上御園遺跡では信長期以降元和９年（1623）までに位置づけられる土師器に、後期清須段階に相当する板状耳で鍔無しの土師器釜Ｃ類がほとんど存在しないことを明らかにし、土器様相に地域差などがある可能性を指摘した。

さらに、土師器皿については使用状況についても議論となっている。灯明具か否かという問題の他に、出土量の多寡が地点によって異なる事例があることが、各地の遺跡で明らかになってきている。筆者は前期清須では中心的な場に近いほど土師器皿の占める割合が高く、後期清須ではその傾向が見られないことを明らかにし、その間に土師器皿の大量使用（すなわち武家儀礼か）に関する画期があるものと予測した（鈴木 2000）。

このように、清須と小牧の間には土師器についてもいくつかの問題点や大きな変化を伴っている可能性が指摘されている。しかし、いずれの論考も土師器そのものを正面から比較して取り扱ったものは無く、検討が十分とはいえない。そこで、瀬戸・美濃窯産陶器である程度変遷をとらえることができた清須Ａ群（典型的な清須前期）→小牧群→清須Ｂ群（天正地震直前）→清須Ｃ群（典型的な清須後期）という遺物群の推移を題材にし、その中の土師器の検討を行いたい。特に、土師器は小範囲にしか分布しない在地的な製品であることが予測されることから、清須と小牧のそれぞれから出土する土師器が同じ系譜として理解できるか否かを中心に検討したい。

資料の紹介（土師器皿）

ここで取り扱う資料は、清須Ａ群（典型的な清須前期）として『清洲城下町遺跡Ⅳ』所収ＳＫ 3029 出土遺物（鈴木編 1994）、小牧群として上御園遺跡ＳＫ 3-200（水野編 2008）、清須Ｂ群（天正地震直前）として『清洲城下町遺跡Ⅳ』所収ＳＫ 6570 出土遺物（鈴木編 1994）、清須Ｃ群（典型的な清須後期）として『清洲城下町遺跡Ⅳ』所収ＳＫ 6151 出土遺物（鈴木編 1994）である（図１・２）。

清須ⅣＳＫ 3029 出土遺物

清洲城下町遺跡 62 Ｇ区で検出された土師器皿を主体とする一括廃棄土坑である。清須Ａ群の資料としては、従来はⅥＳＤ 01 やⅣＮＲ

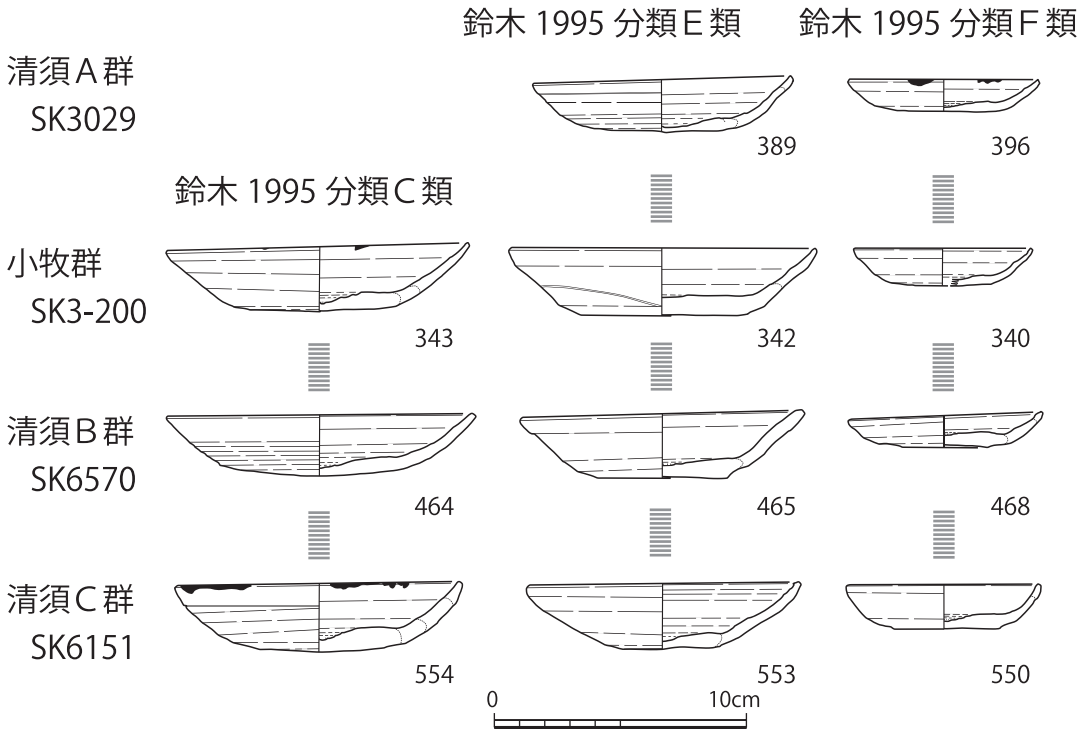

図１　ロクロ調整土師器皿の変遷（s=1/4）

4001 などを取り上げる場合が多いが、これらはおおむね 15 世紀末から 16 世紀初頭の遺物様相を示しており、今回の比較対象としては小牧群との間にある時間幅が大きすぎて適切ではないと思われた。このため、数少ないⅡ -1 期と位置づけられる土師器皿が多い資料群として、ⅣＳＫ 3029 出土遺物を選出した。

ロクロ調整皿は、体部下半と体部上方の外面が強く横ナデ調整されて体部が外反する口径が 12 ～ 18cm の大形製品（鈴木 1995 分類Ａ類）と、体部下端部から口縁端部まで直線的に逆「ハ」字状に開く口径が８～ 18cm の大形製品（同Ｂ類）と、体部下半と体部上方の外面が強く横ナデ調整されて体部が外反する口径が８～ 12cm の中形製品（同Ｄ類）と、体部が摘まみ上げられるように横ナデ調整され直線的に開く口径が６～ 10cm の小形製品（同Ｆ類）がある。ここではＢ類とＤ類を詳述する。389 はロクロ調整皿Ｂ類で、口縁部がやや外折れする特徴は鈴木 1995 分類Ｅ類と近似し、分類は若干あいまいとなっている。外折れする部分の外面に沈線が巡っている。内外面ともに細かい単位の水挽き痕（回転横ナデ痕）が認められる。396 はロクロ調整皿Ｆ類であるが、全体の形状は 389 と同様に、口縁部がほんのわずかに外折れする特徴が見られる。

非ロクロ調整皿は、口縁部を指による押圧で立ち上げ横ナデ調整を施すもの（早野 2005 分類Ａ類）がある。398 は底部内外面が凹凸を極力なくすよう調整され、口縁部の内外面は丁寧に横ナデ調整が行われていた。早野 2005 分類Ａ１類か２類に該当するだろう。

上御園遺跡ＳＫ 3-200

上御園遺跡第３次調査で検出された大型土坑で、瀬戸・美濃窯産陶器大窯第２段階と大窯第３段階前半の製品を含む。上御園遺跡は、信長が岐阜へ移転した後も町屋が継続した遺跡であり、信長期に限定した議論を行う際は注意を払う必要がある。しかし、ＳＫ 3-200 は供伴する資料の状況からみて信長期に限定できるものとして選出した。

ロクロ調整皿は、体部が直線的に逆「ハ」字状に開く口径が７～ 9cm の小形製品（新町 1998 分類Ａ１）と、体部が直線的に逆「ハ」字状に開く口径が９～ 14cm の大形製品（新町 1998 分類Ａ２）がある。340 は皿Ａ１で、内面の横ナデ調整がやや強く施され、体部がわずかに外折れし内面に稜線が存在する。鈴木

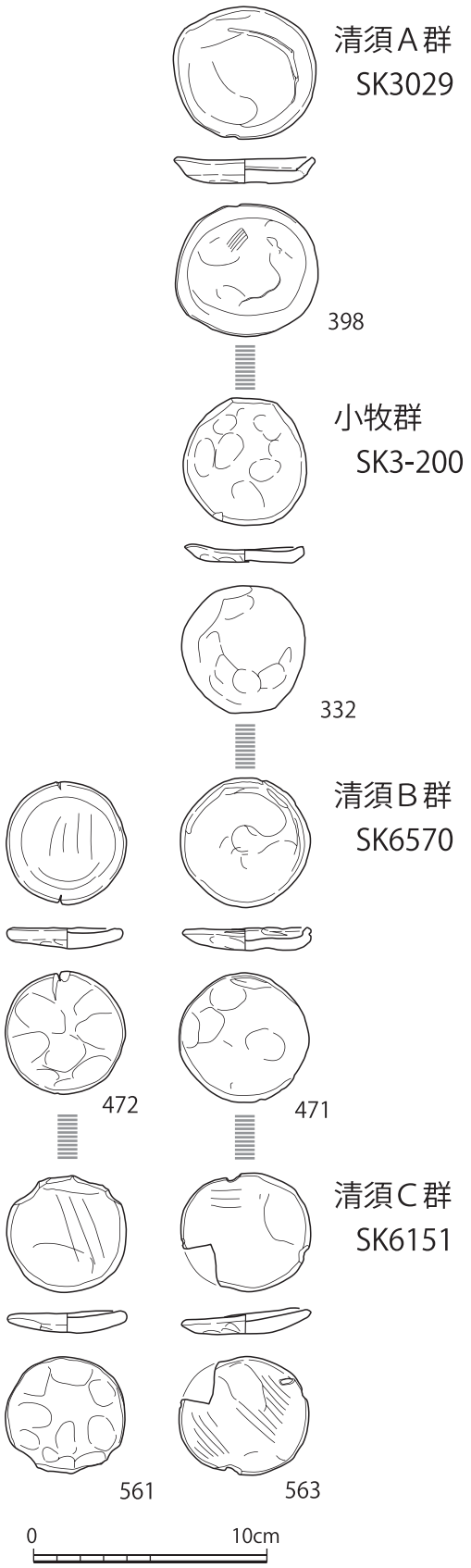

図２　非ロクロ調整土師器皿の変遷（s=1/4）

1995 分類のロクロ調整皿Ｆ類に相当するとみられる。342 は皿Ａ２で、体部は外面がわずかに外反し内面に水挽き痕（回転横ナデ痕）が認められる。底部は粘土柱からの切り離しに伴う突出部（底部と体部の境界に稜線ができる）が残存する。鈴木 1995 分類のロクロ調整皿Ｅ類に相当するとみられる。343 もロクロ調整皿Ａ２であるが、体部はわずかに内彎し内外両面に細かい水挽き痕（回転横ナデ痕）が認められる。底部から体部への形状もなだらかである。鈴木 1995 分類のロクロ調整皿Ｃ類に相当するとみられる。

非ロクロ調整皿は、粘土を円盤状にした後に、中心を指で挟んで持ちもう片方の手の指でその外側をつまみ、つまむ位置を外周に沿って移動させながら短い体部を作る皿Ｂ３（新町 1998 分類）などがある。332 は口縁部外面にわずかに横ナデ調整痕らしきものがあり、早野 2005 分類Ｂ２類に該当するだろう。

なお、小牧では非ロクロ調整皿はいくつかのタイプが存在することが明らかになっている。新町 1998 分類によれば、上述した皿Ｂ３の他に、内面に横方向のナデ調整が施されるのみのもの（皿Ｂ１）、短い体部を持つもの（皿Ｂ２）など５類に分類している（中嶋 1998）。これらは遺構ごとに組成を異にするものであり、系統差を示していると予察される（図３）。

清須Ⅳ S K 6570 出土遺物

清洲城下町遺跡 91 Ａ区で検出された一括廃棄土坑である。上位を天正地震の噴砂で覆われていた遺構であり、かつ後期清須の町屋の遺構配置に合致する遺構でもあった。瀬戸・美濃窯産陶器は大窯第２段階と大窯第３段階の製品を含む。こうした状況から、信長が小牧から岐阜に移転した 1567 年から 1586 年までの資料と推定される。

ロクロ調整皿は、体部下半が丸みを帯びて立ち上がり口縁部が内彎する口径が 10 ～ 16cm の大形製品（鈴木 1995 分類Ｃ類）と、体部下端部から口縁端部まで直線的に逆「ハ」字状に開くが口縁端部や体部下方でやや強く横ナデ調整が施される口径が８～ 12cm の中形製品（同Ｅ類）と、体部が摘まみ上げられるように横ナデ調整され直線的に開く口径が６～ 10cm の

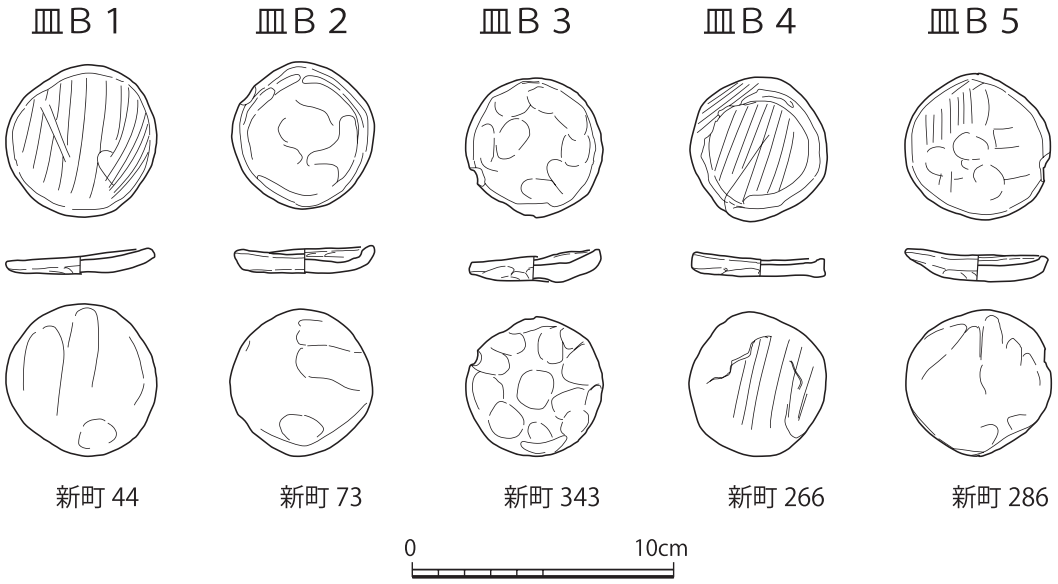

図３　新町遺跡の非ロクロ調整土師器皿の分類（s=1/4）

小形製品（同Ｆ類）がある。464 はロクロ調整皿Ｃ類で、内外面ともに細かい単位の水挽き痕（回転横ナデ痕）が認められる。口縁端部外面での回転横ナデ幅のみがやや広くなっている。465 はロクロ調整皿Ｅ類で、体部下半がやや外側に膨れ、底部は粘土柱からの切り離しに伴う突出部（底部と体部の境界に稜線ができる）が残存する。468 はロクロ調整皿Ｆ類であるが、口縁部がほんのわずかに内彎する特徴が見られる。

非ロクロ調整皿は、横ナデによって口縁部を彎曲させるように立ち上げるもの（早野 2005 分類Ｂ類）と明確な横ナデを施さないもの（同Ｃ類）がある。471 は底部内面にＵ字状のナデ調整が残るもので、ナデ調整が無い部分の口縁部のみが直立気味に立ち上がる。早野 2005 分類Ｂ２類に該当するだろう。472 は非ロクロ調整皿Ｃ類で、口縁部上端面が円周状にナデ調整され、底部内面は一方向の横ナデ調整が残存する。

清須Ⅳ Ｓ Ｋ 6151 出土遺物

清洲城下町遺跡 91 Ａ区で検出された一括廃棄土坑である。天正地震の噴砂を切り込む形で形成された遺構であり、瀬戸・美濃窯産陶器は大窯第４段階の製品までしか含まない。遺構の時期としては、1586 年以降でかつ 1610 年の廃城までには至らない資料として位置づけられよう。

ロクロ調整皿は、清須Ⅳ Ｓ Ｋ 6570 出土遺物と同様に、鈴木 1995 分類Ｃ類とＥ類とＦ類がある。554 はロクロ調整皿Ｃ類で、内外面ともに細かい単位の水挽き痕（回転横ナデ痕）が認められる。やや厚手で口縁端部付近で沈線が巡っている。553 はロクロ調整皿Ｅ類で、体部下端と体部中位がやや外側に膨れ、口縁部は内彎している。底部は粘土柱からの切り離しに伴う突出部は残存するが不明瞭である。550 はロクロ調整皿Ｆ類であるが、体部が内彎し口縁端部は直立気味に立ち上がる。

非ロクロ調整皿は、明確な横ナデを施さないもの（同Ｃ類）がある。561 は底部内面には一方向の横ナデ調整が、底部外面には指圧痕？状の凹凸が観察される。563 は内外面とも指圧痕？状の凹凸を消すように一方向の横ナデ調整が施されている。

土師器皿の編年的考察

以上, 清須Ａ群（典型的な清須前期）、小牧群、清須Ｂ群（天正地震直前）、清須Ｃ群（典型的な清須後期）の土師器皿の事例を詳述した。では、これらをこの順に配列した時に編年的にどう整理できるであろうか。ロクロ調整皿を図１、非ロクロ調整皿を図２に整理し概観すると、一部に齟齬が認められるが、包括的にみると順序は適切に変化しているように思われる。

齟齬があると思われる点は、1）小牧群のロクロ調整皿は全て口径に対し器高がやや高いこと、2）小牧群の鈴木1995分類F類（340）は体部の形状が前後とはやや異なること、3）小牧群の鈴木1995分類E類（342）は底部の形状が前後とはやや異なること、4）清須B群の鈴木1995分類E類（465）は口縁端部が外反し前後とはやや異なること、などである。こうした齟齬は、取り上げた資料が適切ではないために発生した側面もあるだろうが、すぐに適切な資料が抽出できないことは清須と小牧の遺跡間には土器様相が微妙な相違があることを端的に示しているといえる。しかし、そうはいっても、例えば鈴木1995分類C類は小牧群から清須C群までの変遷が比較的整合的に理解できるように見え、この配列が全く意味をなさないわけではない。また、武部真木がいう「尾張北部地域（実際には一宮市域）」（武部2001）と比べてみると、小牧群は清須群の方に似ている。

小牧出土の土師器鍋・釜

次に、土師器鍋・釜について述べておきたい。

土師器鍋についても今回改めて分析を試みている。小牧群と清須群はともに土師器鍋は、半球形内耳鍋と羽付鍋で構成されているが、もともと土師器皿ほど短い時間幅の中に形態の変化を及ぼさない器種であった。変化に乏しい器種であるために、筆者の力量では小牧群と清須群の間に有為な差異を見いだすことができなかった。

一方、土師器釜については、既述したとおり、かつて鍔の有無と外耳の形状から清須前期→小牧→清須後期という流れを予察した（鈴木2001）。しかし、今回改めて確認されたのは、水野聡哉（水野2008）が指摘した信長期以降1623年までの小牧城下町でも板状耳で鍔無しの土師器釜C類がほとんど存在しないことである。加えて、上御園遺跡第3次調査で出土した土師器釜B類の中には、口縁部と体部の境界がなだらかになるもの（276）や口縁部が内傾するもの（263）などが存在する（図4）。これらの特徴は東海地域全般の土師器釜に認められる相対的に新しい要素として認識されるものである。このような資料を含むことは、小牧の中で土師器釜B類が型式学的な形態変化をしている可能性が高いことを示している。それは信長が在城した約4年間の出来事ではなくその後元和年間まで続いた町屋の歴史の中でおこった変化と見るのが妥当である。このような、1567年以降も丸耳で鍔無しの土師器釜B類が出土するあり方は、後期清須の土器様相とは明らか異なるものであると言わざるをえない。

小牧出土土師器の位置づけ

筆者はかつて、中世東海地域（大地域）を（前期で山茶碗と）土師器皿と丸底の土師器鍋類を主体とする土器様相で括ることが可能であると指摘した。そして、土器様相からみて、中世東海地域はさらに南伊勢、中北伊勢、美濃、尾張、西三河、東三河から湖西、天竜川以東の7中地域に区分されると論じた（鈴木2005a）。また、16世紀の尾張はさらに小地域に細分することが可能で、例えば口縁部が外反する鈴木1995分類ロクロ調整皿A類と、口縁部が直線的に開く鈴木1995分類ロクロ調整皿B類の出土分布範囲は異なり、清須などは両者が出土する遺跡であることを明らかにした（鈴木2005b）。このように土器様相を正しく検討するためには中地域内をさらに小地域区分して土器様相を考察しなければならないことは明らかであるが、実際に小地域区分の実態を解明することは難しい。現状では、先の検討結果を踏まえると、小牧と清須は小地域区分では異なる地域として分析を進めるのが妥当と考えられる。

さて、そうした前提で清須A群→小牧群→清須B群→清須C群にみられる土師器の様相を整理してみたい。

1）清須から小牧への移動に際しては、土師器皿と鍋にみるように、型式学的な連続性は、若干の疑問が残るものの、ある程度は認められ、この時点での清須と小牧の土器様相は一連のものとみることが可能である。しかし、土師器釜B類という清須に見られなかった器種を新たに登場させた点は注意しておきたい。

2）また、清須から小牧への移動について、忘

れてはならない点は、土師器ロクロ調整皿Ａ類やＤ類などを主体とする名古屋台地や知多半島を分布の主体とする系譜の土師器が、（その製品が清須で多数出土する状況であっても）小牧には引き継がれていないことである。

３）次に、小牧から岐阜への移動に際しては、井川祥子らの報告（井川 2000）によれば、信長入城後も前代と同様に美濃の土師器がそのまま使用されていることが判明し、小牧や清須の土師器様相は全くみることができない。土師器の系譜としては小牧と岐阜の間には大きな断絶があるものと理解できる。

４）尾張国内に立ち返り、拠点城館が小牧から清須へ移動したという理解にたつと、特に土師器ロクロ調整皿Ｃ類にみるように、土器様相の型式学的な連続性が認められた。また、土師器釜Ｃ類という小牧に見られなかった器種を新たに登場させた点も注目したい。

５）一方、清須へ拠点城館が移動した後の小牧の土器様相については、小牧の中での段階区分がまだ十分にできていない現状では、詳細なことは分からないといえる。しかし、小牧の中で土師器釜Ｂ類が型式学的な形態変化をしている可能性が指摘されたので、清須とは別の小地域として土器様相が展開したことが予測される。

以上の結果をみると、今後はますます小牧の16 世紀中葉以前の土師器様相が問題となるだろう。もともと小牧が清須と同じ土器様相を持っていたか否かという問題は、清須から小牧に認められた型式学的な連続性の意味合いを大きく変える問題である。筆者は、土師器生産者も清須から小牧へ移動し、小牧で製作活動したも

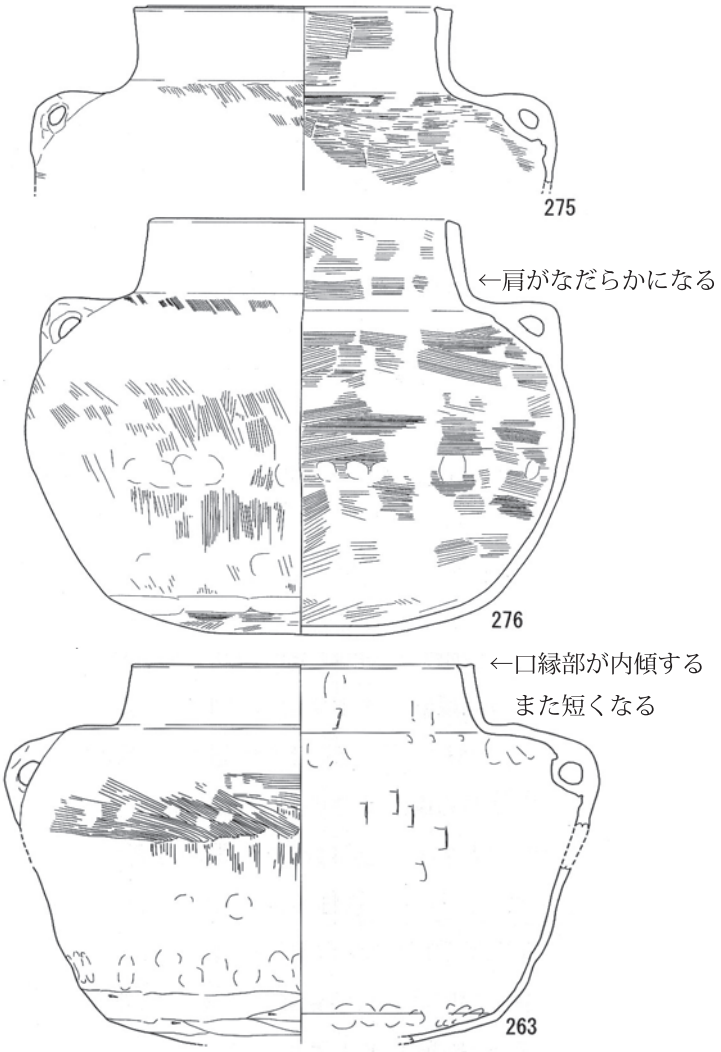

図４　上御園遺跡の土師器釜の実測図（s=1/4、水野編 2008 から作成）

のと想定しているが、その辺りの議論に大きく影響するだろう。

そして、土器様相の整理の結果を踏まえると、土師器生産者は信長の動きとは連動することはなく、小牧から岐阜には移動せずに、一部を除き清須に移転したことが推測されるのである。

このように度々に行われた織田信長の拠点移動については、その移転の内実は必ずしも毎回同じではなく、場合によって異なることが明らかとなった。特に尾張国内から尾張国外への移動に際しては、単純に全ての人やモノを移動させると言うわけにはいかないのは当然のことである。そういった移転の具体的な様相を知る上では、今回示したような分析は、ささやかなヒントを与えてくれるかもしれない。いろいろ課題が残されているが、大方のご叱正を賜りたい。

謝辞

本稿を記すに際して、坪井裕司氏には多大なご協力とご教示を得ている。また、小野友記子氏，中嶋隆氏、水野聡哉氏にもご教示を得ている。記して感謝申し上げる。

参考・引用文献

井川祥子 2000「岐阜市域の 15 世紀から 17 世紀の土師器皿」『城之内遺跡―長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査―（第２分冊）』岐阜市教育委員会
蟹江吉弘 1996『清洲城下町遺跡Ⅵ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 65 集
北村和宏 1996「尾張平野における鎌倉・室町時代の煮沸具の編年」『年報平成７年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター
小牧市教育委員会 1990『小牧市遺跡分布地図（Ⅰ）小牧・北里地区』
佐藤公保 1986「中世土師器研究ノート（１）」『年報昭和 60 年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター
佐藤公保 1987「中世土師器研究ノート（２）」『年報昭和 61 年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター
佐藤公保 2002「尾張西部における中世末から近世の非ロクロ成形土師器皿の諸様相」『研究紀要第３号』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴 1994「戦国時代の尾張型煮炊具の歴史的様相」『考古学フォーラム１』愛知考古学談話会
鈴木正貴編 1994「『清洲城下町遺跡Ⅳ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 53 集
鈴木正貴 1995「清須城下町の遺物様相」『清洲城下町遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 54 集
鈴木正貴 1996「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム
鈴木正貴 2000「土師器皿からみた戦国期城下町と織豊期城下町 - 土師器皿からみた清須城下町の構造とその変遷を中心に -」『織豊城郭第７号』織豊期城郭研究会
鈴木正貴 2001「尾張の拠点城館遺跡出土の瀬戸美濃窯産陶器―時期別組成の分析を中心に―」『研究紀要第２号』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴 2005a「東海における中世土器・陶磁器の編年」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集』
鈴木正貴 2005b「名古屋城三の丸遺跡出土土師器皿の変遷」『名古屋城三の丸遺跡Ⅶ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 127 集
千田嘉博 1989「小牧城下町の復元的考察」『ヒストリア第 123 号』大阪歴史学会
武部真木 2001「中世土師器の様相―12 ～ 16 世紀の尾張平野」『考古学フォーラム 13』愛知考古学談話会
田中城久編 2008『上御園遺跡第３次発掘調査報告書』小牧市教育委員会
中嶋隆ほか 1998『小牧城下町発掘調査報告書―新町遺跡―』小牧市教育委員会
前川要 1988「近世城下町発生に関する考古学的研究」『ヒストリア第 121 号』大阪歴史学会
水野聡哉 2008「第４章まとめ　第２節遺物」『上御園遺跡第３次発掘調査報告書』小牧市教育委員会
早野浩二編 2005「『清洲城下町遺跡Ⅸ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 131 集